

2020年1月4日

## 舞台 — 囲われた場所

待ち合わせの場所は尖沙咀のサイエンス・ミュージアム。歴史のあるホテル、ザ・ペニンシュラの向かいにある。太平洋戦争時には、イギリス軍を制圧した日本軍が、このホテルの336号室でイギリスとの調印を交わしたとある。それが、1941年。ザ・ペニンシュラが開業した1928年から13年目の出来事だ。その調印式から約56年目に私は以前このホテルを見上げ、その23年後の今、ここにいる。このホテルが建てられた当時の尖沙咀はのどかな漁村だったという。混沌とした香港の歴史は意外に一人分の人生の手の中に納まってしまうということか。

現れたのはミリタリージャケットを着た、細かなウェーブのかかった栗色の髪の毛の女性だった。明るい笑顔。一目で聰明な人物だと感じさせる。

「地下鉄は使わないようしているの。今日は香港島からスターフェリーで来たのよ。」

彼女が地下鉄を使わない理由。それは、湾仔の駅等にもみられた、地下鉄設備の破壊の理由と同じく、地下鉄の運営会社が権力と結託して市民への暴力に関与したとの理由だ。一方で、破壊活動は抗議派に扮装した権力側、つまり警察が敢えてネガティブな印象を与えるための意図的なものだったとの話も出ている。情報は混乱し、錯綜している。





あらかじめ取り交わしていたメッセージでは、今日、食事をしながら話を聞かせてくれることになっていた。何か食事のリクエストはあるかと聞かれていたので、香港の人達の生活を感じられるようなカジュアルな場所だったら最高だと答えていた。尖沙咀の路地を歩きながら話す。

「私は舞台芸術をしているの。ワークショップで講師もしているわ。」

舞台芸術と、デモのMC。なるほど、そうつながっていたのか。彼女はプレイバック・シアターという活動に関っている。参加者は自分の体験を即興劇として表現する。彼女の舞台表現の活動で目指しているのは、ハンディキャップを持つ人も含めて、ともにコミュニケーション手法を模索し、多様性を獲得することだという。アートと社会、彼女達は常にその関係に向き合ってきていた。

私は香港の抗議者にコンタクトをとるために熟慮できていた訳ではなかったのだけれど、今回出会うことの出来た人々の姿勢に圧倒されるばかりだ。それは香港がそんな土壌を育んでいるということかもしれないし、抗議活動というキーワードで繋がる人の底流にある意識に触れた結果ということなのかもしれない。

彼女のお勧めの、その店は私の期待に完璧に答えてくれていた。混雑はしているものの、かなり人気の茶餐廳（ツアツアンティン）の様だ。洗練された空間ではないけれど、人々に愛される店。もちろん、イエローだ。

プレイバック・シアター。  
参加者の体験を即興劇として表現する。  
コミュニケーションの模索としての芸術。

食事をしながら、デモの過程を聞く。警察に対する不信の根が深いことが伝わってくる。元日のデモの当日、私が驚いたのは、まずははじめに、想像を超えるその威圧ぶり、そして、間近で見た警官の中に、若い女性も含まれていたことだ。これだけ拡大した抗議活動のことを考えれば、警察という職業を続けることの葛藤もあるはずだ。彼らは、そして彼女達はどんな思いでその職業を続けているのだろう。香港の警察は優秀であると言われ、当然彼らはその仕事に誇りを持っていたはずだ。ここまでデモ隊との衝突が続く時、香港の治安を維持する目的は本来の市民を助けるためという目的から逸脱し始めているのではないか。知人や友人から距離を置かれてしまったり、責められたりすることも想像に難くない。当然、警察を辞める人も出てくる。そして、そんな彼らは警察の暗部をリークし始めるのだ。警察内で下がる士気、連鎖する退職者。体制維持のために、補充されるのは中国本土の警察だ。

警官の胸には警官識別番号が記載されている。車両にあるナンバープレートのようなものだ。それが彼らが正々堂々と権力を振りかざしていることの表明でもある。私の香港滞在中に、その識別番号を詐称しているとのニュースが話題になっていた。同一の番号をつけた警官が複数いたとの報道だ。その疑惑に対して警察側は、手違いで同一識別番号をつけたままの出動があったと弁明しているが、そもそも同一の番号を用意していることの不自然さへの疑念は残る。

警察はマフィアとも繋がっている。俄かに信じ難いことではあるが、彼等はマフィアの力も借りながら人々の制圧を試みている。2019年7月21日、深圳に近い北西の街、元朗の地下鉄の駅で、抗議デモへの参加者に対して白いシャツの一団が襲い掛かった。

デモに参加した人々に対して棒で殴りかかる、白シャツの集団。電車に逃げ込んだ市民に対しても執拗に追いかけ、殴りつける。パニックに陥った市民は何度も警察に通報し助けを求めるが、警察が駆けつける様子はない。その時に限って、何故か警察がほとんど不在だったとのことだ。停車中の警察車両を見つけた市民が、助けを求めるも、その車両は立ち去ってしまったのだという。ようやく警察が来た時には白シャツ集団は立ち去った後であった。妊婦を含む45人が怪我をして、1人の重傷者が出了とのことだ。

白シャツ集団は、地元のマフィア「三合会」であると言われている。三合会のメンバーの家族と言われる者の証言では、デモ参加者を攻撃するにあたり、自分達は白いシャツを着ることで仲間を間違えて攻撃しないようにしろとの指示が出ていたそうだ。

この状況に対して香港市民は警察とマフィアの結託を確信した。翌22日には、怒りに声を上げる市民が、元朗の警察署に集結して、元朗の街は厳戒状態になった。それ以来、毎月21日に激しい抗議活動が行われ、その日になると地下鉄が閉鎖されるに至っている。



元朗駅で市民に襲い掛かる  
白シャツ集団

三合会の闇は深い。古くは、孫文がその会長の座を引き継いでいたこともある、満州族が建国した清朝の打倒を掲げる漢民族の右翼秘密結社であると言われている。1895年に革命に失敗し、孫文は日本に逃れ、三合会は香港に移動した。

その三合会が香港での拠点としたのが、今は無き九龍城砦だった。かつて清朝の砦であった九龍城砦は、英國への香港割譲の例外地とされていたが、英國の圧力で清朝政府の統制も及ばなくなり、事実上の無法地帯となった。

違法建築として積み上げられた迷宮。東京ドームの約半分程の敷地であったが、東京ドームの収容人数に近い約3.3万人から5万人が生活していた。1990年頃でも三畳一間の部屋の家賃が月額約4000円であったという。

「東洋の魔窟」と呼ばれたその場所は、不法移民、犯罪者達が身を隠し生活する場所として機能した。その混沌を取り仕切っていたのが、三合会であった。九龍城砦は1993年から1995年にかけて取り壊され、今は伝説の如く語られている。



(左) 中華民国の国父、孫文。1866-1925  
(下) 19世紀末の九龍城砦  
(次頁) 取り壊し直前の九龍城砦







日本を含む民主主義国から見ると邪悪であるようにさえ見える権力の行使、それは、情報統制の取れた中央集権国家では実際に存在し得る。スキャンダルは揉み消し可能であり、反発者は抑え込み口を封じる事ができる。国境の向こうにあるのは、一見似たような現代社会ではあるものの、異なる法則で社会が回っている。一国二制度という特殊な境界線上に位置する香港において、その矛盾が噴出しているのだ。

西側の社会で育った人々が、中央集権国家の論理を受け入れられない事は自然だ。だからといって、若さの勢いに任せて強い反発に従い取り返しの着かない所に自らを追い込んでしまうという悲劇を放置していくことにはならない。「そうしなければ伝わらないものがある」と雨傘運動のジョシュア・ウォンは語った。ジョシュア、そして怒れる勇敢な抗議者達よ、焦らないで欲し

い。その言葉は免罪符ではなく、悲劇を加速するだけだ。

社会に求められるものは、悲劇を解消する仕組みだ。より平和的に、意見を表明し、それが強い力を持って人々に伝わること。正しい民意の表明だ。権力がそれを認めなければそれまでだと考えるには、テクノロジーを過小評価しすぎている。改竄のできない重要な情報技術の発明を私たちは近年、目の当たりにしたばかりではないか。

その技術、ブロックチェーンが社会に大きな影響を与えたことは誰もが認めるところである。通常のシステムは、システム管理者であればデータの変更は可能だ。ただ、ブロックチェーンでは、記録された内容は基本的には変更はできない。システムは、多数の利用者間で共同管理され、その計算能力の過半数以上を占めなければ他者の合

意なく記録することもできない。利用者によるこの分散管理方法によって、中央集権的な機能は不要となる。奇しくも、中央集権から民主化の流れに符合している。この技術を利用して、誰もが消し去ることのできない、民意の表明が実現できないか。それが、民意を伝える力を持つ事で、蛮行に頼らずに民意を伝えられるようになる。悲劇を加速させるのではなく。

「あなたは、行動的な技術者ね。技術者は部屋に閉じこもってばかりじゃないのね。」

それは私に限らない。むしろ、この旅を通して、私が感じた香港の熱意そのものだ。ここ香港では、母国の民主主義を守るという巨大な夢に向かって、多くの人々が自分にできることを探している。HKmap.liveを開発した開発者然り。多数でのデモ参加

者間の通信手段確保の為にメッシュネットワークを導入しようとしている技術者然り。

そして、それはもちろん技術者に限らない。今話している、彼女。そして、舞踏家の彼女、ホイチュウ、その友人達。彼女達との出会いは、抗議活動に向き合うアーティストという、私にとっては今まで出会ったことのない類の人々との出会いだった。葛藤は多いだろう。ただ、その葛藤はアートの持つ可能性ゆえなのだ。アートとは、快樂のためだけに存在するのではない。それは、人を惹きつけ、メッセージを伝える為の手段にもなり得るのだ。



## Dog99 — 境界

香港、最後の夜が更けようとしていた。ロシア人のエンジニアからのメッセージが届く。彼が誘ってくれたそのカフェ、「Dog99」の場所が示されている。それは、ドミトリーから歩いて10分ほど。JCCACから程近い場所だ。

カフェと聞いてイメージするのは、リラックスできる空間だ。だが、その店「Dog99」に着くと私は面食らった。店は小ぶりで、どちらかというとコーヒースタンドに近い。多数の客は、路上

に無造作に置かれた簡易的な椅子に座っている。おそらくは非合法的に路上を使っているのだろう。夜遅い時間、周囲の荒んだ雰囲気もあり、ちょっとした無法地帯といった趣だ。そんな雰囲気が若者を惹きつけているのかもしれない。よく見ると、店の前の路上に置かれた数台のミニバン等の中にも人がつまつて談笑している。夜、遅い時刻なのに驚く程、人が多い。

遅れて来たロシア人の彼と合流すると、彼はこの店について教えてくれた。

「面白いだろ。このミニバンは皆ここのオーナーの物なんだ。ほら、向かいに洗車サービスの店が見えるだろ。あそここのオーナーがこの店を始めたんだよ。」

ロシア人の彼に紹介されて彼のカフェ仲間、香港人の女性を話しができた。

「ある時ね、夜遅くに無償に美味しいコーヒーが飲みたくなったの。そうして調べたら24時間やってるこの店を見つけたのよ。」

店内には多数の種類のコーヒーがラインナップされている。この店に限らず、私は香港滞在中に、質の高い、ただし高価なコーヒーを出す店の多さに驚いていた。そんなカフェに比べるとスターバックスは、カジュアルすぎるよりも思える。

ロシア人の彼は、私が深圳に行ったときの話を皆してくれとせかす。

中国が想像以上に平和的で驚いた。それは、香港で起きていることと対照的だった。その景色を見ると香港はまるで、物騒な生活を忘れない市民が、平和になることを拒否しているみたいだ。もちろん、それは一面、そして一瞬を切り取るからこそ見える皮肉なのだろうけれど、そうやって多数の香港の人が見ないふりをしている面もありそうだ。私はそう話した。

「でも、独裁者の下での平和なんて私は嫌。みんな顔色を伺って生きなきゃいけないんでしょ。」

顔色を伺って生きる、言われてみればそういうだけれど、それは日本では当たり前の様にやっていることのようにも思える。忖度の文化。指示に従うだけでなく、指示を先読みして、自ら首輪を掛けに行く。指示がなくとも上司に手柄を与えられる優秀な部下になること。自分が会社員として仕事をし始めてから染まった考え方だ。中央集権の弊害が、指示待ちになることによる個人の思考停止にあるとしたら、それを突き抜けて指示の先読みをする、その忖度文化は分散思考を活かす点で中央集権とも相性が良いということになるのだろうか。いや、問題はバランスが崩れて独裁者の暴走を止められなくなることだ。

毛沢東が1958年から始めた「大躍進政策」で行ったことはまさに「暴走」だった。冗談のようなこの政策名を誰も止められなかったところに如実に現れている。毛沢東がこの「大躍進政策」を掲げたのは、当時のソ連の最高指導者、フルチショフが掲げた米国を抜く経済大国を目

指すという15カ年計画に触発され、「中国も負けないぞ」と言わんばかりに当時第2位の経済大国である英國と同じく15年で抜くと発表したからであった。動機からして論理性に欠けるが、その目標ありきで全てが「暴走」することになった。

特定の農工業についてだけ目標が設定されたことから、国内の需給バランスを無視してその目標値の達成だけに全力が注がれる結果となり、多数の過剰産出と物資不足が発生した。官僚機構の中、失敗は許されず、各地の責任者は結果を水増しして報告。毛沢東はさらにそれをもとに成長計画を水増しし、当初15カ年の計画が3カ年に短縮された。

農民は農地の手入れよりも過剰な鉄の増産に従事することになるが、出来上がった鉄は使い物にならない粗悪な品質であった。基礎技術が不足していた結果だ。害鳥とされたスズメを大量に駆除したことで、生態系を破壊してしまい、イナゴ等の大量発生を招いた。稚拙な知識に基づく新農法を大規模に導入することで、凄まじい凶作を引き起こした。

毛沢東の政策を諫めた大臣に対しては、これを共産主義を否定するものだとして失脚させた。これらの結果として大躍進政策が生んだ餓死者は1500万人に達し、

「歴史上、世界で最も多くの犠牲者数を出した社会主义政策」となった。その後、毛沢東が一度権力の座を退いた後に、復権を狙い扇動した文化大革命でも一説には1000万人の死者が出たとも言われている。

毛沢東は狂人だったのだろうか。

勿論、少なくとも以前は、狂人ではなかった。毛沢東の言葉や文章は人々を魅了し、地主からの搾取に苦しむ人民の解放を唱える共産主義思想は、多数の市民の信頼を得た。ただ、そこには、市民が幻影として見た、理想へと導くリーダーとしてではなく、したたかにあらゆるものを利用しようとする策略家としての才能があったのだと言える。本来、マルクスによれば共産主義は資本主義の帰結となるはずのものであったが、毛沢東はそれを農地解放と読み替え、人民の支持を得る手法として採用した。共産主義というイデオロギーは、毛沢東にとって手段に過ぎなかった。

実際、毛沢東が30歳の時、共産党内部での権力を得るに当たっては、その後争うことになるはずの国民党への併合をソ連の共産党より指示された際に、イデオロギー上の矛盾に当惑する中国共産党幹部を後目に、真っ先にその指示に従うことで党内の存在感を上げた。また、その後の国民党との決別にあたり、中国共産党的武力部隊である紅軍の指揮権を得るために、同胞、もしくは本部すら欺きながらその勢力を伸ばしていった。その手法は、都市の攻略戦略を企画し、他隊との共同作戦を本部に承認させる形で他隊を乗っくるというやうなものだ。

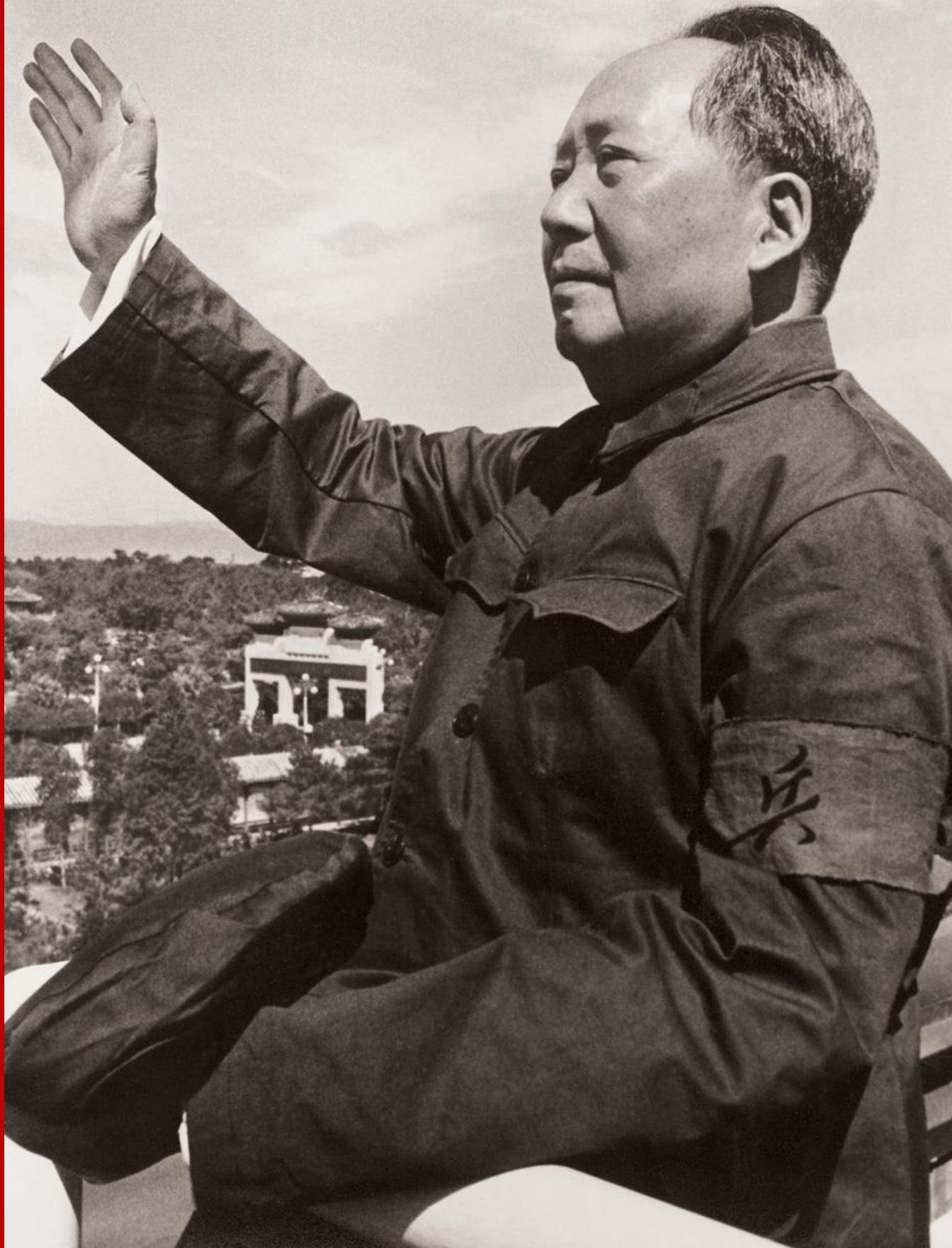
その際に多用されたのは情報のコントロールだった。当時は、手渡しの文書による連絡に頼っていたが、毛沢東は独自の通信体制を整備し、党中央からの文書は最初に自分が読めるようにした。また、共同作戦をとる他隊の指導者との役割分担では、自分が発出文書の最終承認者となるようにした。こうして必要に応じて情報を改竄、隠蔽することで、権力を伸

ばしていった。例えば、共同作戦をとる他隊指導者の朱徳に対しては、党中央からの指示を捏造し、自分が特別委員会の委員長、朱徳は軍師長になる旨任命されたと信じさせた。軍師長とは、毛沢東が党本部に無断で定義した役職であったが、この様な偽の情報を活用することで、同胞を欺きながら権力をつけていったのである。

また、国民党の暗号通信の解読手法を手に入れていたが、その事実も共産党内部には知られず、自らの戦績を上げることにのみ活用した。

時に、共産党への背任行為さえ含まれるもの、毛沢東の策士としての才能が国家間の駆け引きとして使われるようになったことで、さらに国民からの支持は加速することになる。

1949年の中華人民共和国の成立以降、中国の最大の懸念はソ連の属国になり下がる可能性であった。共産主義革命を経た多くの東欧諸国はソ連の属国になっていた。中国の独立のためには、軍備の拡張が必要であったが、毛沢東はこれを、朝鮮戦争を活用することで達成した。北朝鮮が韓国に侵攻するにあたり、ソ連は、韓国側にいる米国との直接対決を恐れ、北朝鮮への支援を躊躇していたが、ここに中国が積極的に関与し、豊富な人的資源による支援を北朝鮮に与え、同時にソ連からは中国国内での軍事工場の設置を引き出した。人的資源といつても実際には旧国民党軍のものから優先して現地に送られた。食料不足は深刻で、兵士達は現地でオタマジャクシを食べながら命を繋いだとされている。





朝鮮戦争の長期化で北朝鮮が事実上の敗北を認めて、中国はそれを認めさせなかった。まだまだソ連から軍備拡張の支援を引き出せると踏んでいたからである。米国が中国への核攻撃について言及すると、毛沢東はさらに喜んだ。核技術の提供を引き出せる可能性まで視野に入ってきたからである。最終的には核技術までは引き出せなかったが、毛沢東の手腕により、中国は急速な軍事力拡張を達成し、結果的にソ連への属国化を免れたことになる。

中華人民共和国設立という実績を成し遂げた策士、毛沢東。その後の大躍進政策、文化大革命での失策との対比。何が毛沢東を変えてしまったのか。

「権力は腐敗する。絶対権力は絶対に腐敗する」

そう語ったのは19世紀イギリスの思想家、アクトン卿だ。自由主義の思想家ハイエクはこれを引用し、その理由についての説を展開した。曰く、権力とはグループを代表する力であり、グループ内での目的的共有がグループの求心力となる。グループの構成員は、その目的の達成のために権力者に力を与える。力を与える際に陥り易い罠が、「有事の思考」、すなわち、「今は特別な時である。目的達成のためには平時の思考を止めなければいけない。」という発想である。これが意味するところは、平時における道徳基準が、有事には蔑ろにされる。それ故、道徳に背く判断がされる、ということだ。



ジョン・アクトン。1834-1902（左上）  
フレードリヒ・ハイエク。1899-1992（左下）

「でも、それだけじゃないと思う。リーダーは、ある意味、実際に狂うんだと思うよ。」

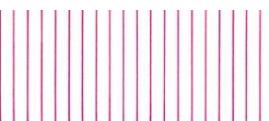
私はそう話した。人間の思考は、コミュニケーションを前提として成り立っている。それは、生物学的な意味で、である。橘玲氏は『朝日ぎらい』の中で、「正義は快楽」であると述べた。それは、正義を振りかざし他人を糾弾することで、私たちの脳は快楽を得るようにできているということだ。それは、私たち人類が長い時間を過ごしていた狩猟社会の中で、グループの規律を守るものが生存競争を勝ち抜いてきたからであると。その正義とは、グループの為の行動として、後天的にグループ毎に規程される。これは、メディア上でバッシングであったり、パワハラを行う心理を説明するものであるが、これは巨大な組織のリーダが独裁者になることも説明できるのではないか。

リーダの発言は、そのグループの中の正義として認識される。大きな権力を持ったリーダは自分の発言自体が正義の行使となり、脳は快楽を感じることになる。私たち人類は、狩猟社会を生きている間は、グループといつても限られた数のメンバーしか存在しないような状況で長らく暮らしてきた。それが、毛沢東は数億人の人口を誇る中国のリーダである。しかも、そのリーダになるべく、洗脳に近い手法を導入までした。結果、毛沢東の発言は絶対的な正義になってしまった。

自分の語ることがすべて正義として扱われること、それは、本人の脳内では快楽物質が分泌され続けることを意味する。過剰な快楽が、人格を破壊する。快楽物質、ドーパミンの過剰分泌は、統合失調症の原因といわれており、攻撃性を増すとの研究もある。正しい判断はもはや期待できなくなる。異常なまでの権力が、人を狂わせるのだ。

「私のパパは会社の偉い人みたいなんだけど、そんなに狂っているように見えないけどね。」

「どんな人も、大抵は葛藤の中で生きているはずだよ。ライバルとの競争だったり、さらに上位の役職からの批判だったり。時には部下からの突き上げだってあるだろうしね。日本の安倍首相も各方面からの批判にさらされないと見ると、ドーパミンの過剰分泌による人格崩壊の心配はまだなさそうだね。」



朝日ぎらい  
よりよい世界のためのリベラル進化論  
橘 玲  
*Tachibana Akira*





毛沢東の批判をする幹部がいなかつたわけではない。毛沢東は、それを排除する権限を持ってしまい、実際に排除してしまったのだ。

劉少奇は、市民の為に毛沢東を批判した稀な中国共産党幹部だった。毛沢東に続くナンバー2の役職の立場で「大躍進政策」を公然と批判し、軌道修正を行い数々の政策を中止させた。それによって中国は飢餓から脱したのだ。政策の失敗が許されなかつたが故に水増しされていた農業生産量をもとに、ソ連への食料輸出が行われたが、それを止めるだけでも大きな効果が出た。劉少奇が中国国民の支持を得る一方、毛沢東は失脚することになった。

毛沢東による復讐が起つた。毛沢東の扇動した文化大革命だ。その中では劉少奇は資本主義の復活を狙う者として、糾弾されることになった。糾弾の対象は、劉少奇の美しい妻、王光美にも及んだ。それは毛沢東の妻、江青の指示であったと言われている。外交の場で劉少奇とともに活躍する王光美に嫉妬したのだ。メディア上で取り上げられていた王光美のチャイナドレス姿も資本主義の象徴とされ、屈辱的な姿に仕立て上げられ公衆の面前で侮辱された。

こうして毛沢東は、劉少奇を含む否定派を排除し、復活したのだ。

劉少奇とその妻、王光美（上）

劉少奇とその部下、鄧小平は毛沢東により失脚させられ（下から2段目）、王光美は屈辱的な姿で侮辱された（下）



私たちは、すぐ近くの茶餐廳で食事をすることにした。そこも深夜は路上にテーブルを出しており、荒んだ街並みを眺めながら軽食ができる。それもきっと違法なのだろうけれど。

ロシア人の彼がスマートフォンで付近の地図を見てくれた。

「ここのすぐ近くに、バウンダリー・ストリート（界限街）っていう通りがある。明らかに不自然な道だよね。ちょうどここが、当時の中国と英國の国境だったんだ。」

バウンダリー、境界。民主主義と共産主義の境界。自由と独裁。平和的抗議と、闘争の境界。そこは混沌としていて、荒んだ場所だった。私は聞いてみた。

「この抗議活動は、中国本土の民主化に広がるのかな」

会話が止まり、少し驚いた風な反応だ。そう、香港の人々は望んでいるわけではない。その事実、イデオロギーと感情の境界には片目をつむっている。中国は中国。そこが気に食わないから、入ってきてほしくない。それだけなのだ。彼女は話をそらす。

「中国の武漢で、新しい肺炎が話題になってるみたいね。あなたはラッキーね。あと少しタイミングがずれていたら日本に帰れなかったかも。」

2020年1月5日

# 兆し－隠しきれないもの

香港を離れる日の香港国際空港。空港に入る前から手荷物検査が行われている。ここしばらくは保安体制はずっと強化されたままなのだろう。以前のニュースで流れていた、多数の抗議者が香港国際空港に座り込んだ時の様子が思い浮かぶ。その時のニュースは抗議活動で多数の欠航便が出たと伝えていた。香港の玄関口で声を上げる。本当に長期化すれば、グレーター・ベイエリア構想にも影響は出るのか。抗議派の声の力はどこまで及ぶのか。

メッセンジャーを通して、舞踏家の彼女に感謝の言葉を送る。彼女のお陰でこの旅は本当に実りの多いものになった。

「知ってる？ 武漢で発生した肺炎のこと。私たち抗議者の中では、それは中国政府が意図的に仕掛けたものだという話がでている。」

香港にいる間にニュースに現れ始めた、武漢での謎の肺炎の流行。香港の地にいても、それは中国本土の奥深くの話であるように感じていたので、彼女たちにそんな発想があるのは意外だった。

「…君たちは皆、本格的なガスマスクを持ってるから大丈夫なんじゃないか？」

冗談のつもりだったが、彼女はシリアスなままだ。抗議者達の間では、以前から予想されていたのだと彼女はいう。

中国から米国に亡命した資産家、郭文貴。かつてトランプ大統領の参謀だったスティーブン・バノンと組み、反中国共産党の活動を進めている。その郭文貴のリークした情報の一つに、香港デモの鎮圧のために、武漢の研究所で作られた生物兵器が使われるというものがあった。香港の抗議者達はその情報に息を飲んだ。そんな警戒をしていた矢先に起きた、武漢発のウィルス蔓延だ。抗議者達は敏感に反応した。恐れていた事態、噂にすぎないと信じていたかったことが実際に起きたのだ、彼らはそう考えた。

いずれ、その時点で実際に被害にあっていたのは武漢、中国だけなのだから、中国政府が意図的にばら撒いたということは無いはずだ。

実際、その日本への帰国日である1月5日の時点では、香港の街中、そして空港でも危機感はほとんど感じられない。台湾では、武漢当局が肺炎の発生を認めた12月31日当日から、武漢との直行便に対して、航空機機内での検疫を開始したとある。その判断の速さは世界の中で群を抜いており、後に台湾の対応は世界からの絶賛を受けることになる。ただそれは、現在の台湾における対中国インテリジェンスの力の入れ様を物語っている。生物兵器を含めて、中国からの攻撃の可能性に敏感であり、予め綿密な準備をしていた筈だ。蔡英文総統は2020年1月15日に受けた英国BBCのインタビューにおいて、こう語っている。

「中国との戦争がいつ起きるか、その可能性は排除できない。だから臨戦態勢で有事に備えなければならない」



機内検疫を始めたその12月31日、台湾の厚生労働大臣にあたる陳時中氏はWHOに、中国・武漢で特殊な肺炎が発生していることを通知した。人から人への感染が疑われ、患者が隔離治療を受けており、警戒体制の早期構築が必要だと進言したのである。台湾はその情報を入手していたのである。中国が人から人への感染を公に認めたのは1月20日になってからのことである。中国は隠蔽していたのだ。

中国の初動対応を知る上で手掛かりとなる情報がある。中国共産党系の月刊誌「人物」のWebサイト上で一時的に公開されていた、とある記事。2月10日に一旦公開されたものの、数時間後に削除されている。そこには、武漢市中心病院に最初の新型コロナウィルス感染者が担ぎ込まれた様子が記されていた。

この記事によると、最初の患者を確認したのは、12月16日。この時点では原因不明

の高熱が続いている患者であるとされていた。その患者は、武漢市の華南海鮮卸売市場で働いていた。

12月22日に、それがコロナウィルスであること確認。

12月27日、湖北省中西医結合医院の張繼先医師が同様の3人の患者の診察を行ない、人から人への感染が疑われる例として当局に報告。公式にはこれが最初の報告であったとされているが、この時点では武漢市中心病院にはその情報の共有はされていなかった。

12月30日、武漢市中心病院において、院内で発見されたそのコロナウィルスは人から人へ感染する、SARS相当のものである疑いが高いことを確認。病院内は騒然となる。院内の眼科医、李文亮医師もこの情報を確認し、周囲に転送している。午後10時、武漢市衛生健康委員会より、以下のとおり隠蔽の指示が出されている。



「市民のパニックを避けるために、肺炎について勝手に外部に情報を公表してはならない。もし万一、そのような情報を勝手に出してパニックを引き起こしたら、責任を追及する。」

武漢中心病院の記録を公表したのは艾芬（アイ・フェン）女医。上記の隠蔽指示がでたものの、その直前に武漢の医療関係者に共有していた。そのため彼女は訓戒を受けている。

12月31日、市政府が原因不明の肺炎感染者を初めて公表。この時点では人から人への感染は確認されていないとされていた。

1月3日、李文亮医師は「インターネット上で虚偽の内容を掲載した」として、訓戒処分を受けている。

1月19日、中国国家卫生健康委員会が武漢に入り、人から人への感染があり得ることを確認し、党中央に報告。

1月20日、習近平主席が、人から人への感染があることを認めた上で、「情報を隠すことなく、全力で感染症対策に取り組むように」と指示。

1月23日、武漢市を交通遮断で「封鎖」。旧正月である春節の連休が始まる前日である。

中国では災禍に際して、常にと言つていいほど隠蔽が行われる。2002年11月に広東省で発生したSARSにおいては、それが公表されたのは翌2月。

その際にも早期に警告していた医師は政府により処分されている。

ただし、それは中国に限らない。全ての組織はネガティブな情報の報告を最小限の共有に留める性質を持つ。すなわち、ピラミッド型の階層構造を持つ組織においては同様の問題を孕んでいることになる。下部組織から上位階層への問題の報告は隠蔽されがちである。ネガティブな事案はその組織、もしくは組織のトップの評価を下げる。故に問題は組織内で完結することが望ましい。ただし、上位階層では早期に情報を把握したいが故に、下位組織からの問題の報告が遅れた場合にはペナルティを課すことが多い。それはある種のバランスを保ち、ある程度、適切な階層まで問題の報告は行われることになるが、いずれ、上位階層に報告が届くまでには、各階層の判断が行われ、それによるタイムロスが発生し、結果的にそれは隠蔽であるとされる。

この構造的な問題を解決するためには、事案の分類ごとに権限を分散し階層を軽減するしかないが、こと頻度の低い災禍にあたっては、例外的な扱いとして最も報告に時間がかかるルートに分類されがちである。さらには、最上位階層まで届いたとしても、大きな災禍においては「人々の不安を呼び起さないため」という理由が採用され、外部への公表は差し控えられる。時に、人々の不安は権力を握るがことになりがちがあるので、この種の隠蔽が行われることになる。

つまりのところ、巨大な中央集権体制では隠蔽は避けられず、それは特に疫病の様な、進行中の災禍においては初動の遅れに繋がり、その遅れは最終的には強い批判となってその権力体制を攻撃することになる。おそらくは世界一といつてよい権力機構である中国共産党も、その例外ではないということだ。

統制力の裏返しである隠蔽体質。時に中央集権体制は統制力による効果を見せる一方、疫病への対処としては脆弱な面があるとも言える。

後日、米国を中心に中国政府に対して、その隠蔽の事実、初動の失策を非難する声が高まることになるが、巨大な権力体制でそれを避けることは極めて困難だろう。それを、膨れ上がった権力機構の弊害と捉えるべきであるか、中国という巨大な国土そして市場を統制し、総体として力を持つことの代償と捉えるべきか。

情報の遅れの他にも、隠蔽の指摘はある。感染が中国外に広がりつつある時、米国は中国からの渡航禁止措置を講じようとした。その際にWHOは、人から人への感染の証拠はないとして時期尚早と通達

した。後にトランプ大統領はWHOとの対応が感染者を20倍に増やした理由との見解を突きつけることになった。人から人への感染の証拠はない、WHOにその発言をさせたのは中国である。WHOへの中国の財政貢献は米国に続いて世界2位、その額は米国の半分ほどであるが、WHOのテドロス事務局長は、中国から巨額の投資を受けているエチオピアの出身であり、中国には逆らえないと言われている。

中国が隠蔽を進めた理由は、経済的な影響への懸念以外に、この新型コロナウィルスは武漢のウイルス研究所から流出し

たからではないかという憶測が渦巻いた。トランプ大統領はその説を推し進める第一人者だ。そして、私にメッセージを送った舞踏家の彼女等、香港の抗議者たちの間にもその説が広がっていた。実際に、香港では集会の中止等の措置がとられ、事実上、デモどころではなくなってしまった。

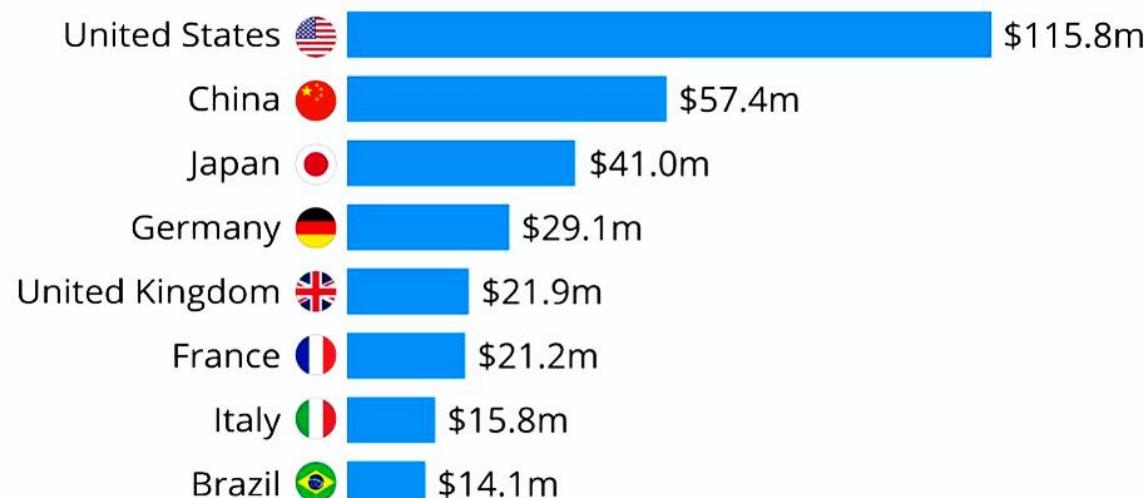
実際にCOVID-19が漏洩した生物兵器であるかどうかは別にして、生物兵器の研究はどれほど進められているのだろう。

生物兵器の使用は1925年のジュネーブ協定で禁止されているが、日本は第2次世界大戦までは生物兵器の先進国であった。731部隊と呼ばれるその組織では、中国に対して生物兵器を使っていたとの証言がある。そこでは捕虜を対象とした人体実験も繰り返し行われていた。「マルタ」という隠語で呼ばれた被験者達は、生きたまま解剖されたのだという。性病実験のための強制性交、女性マルタへの強姦等、731部隊の闇は深い。日本に倫理観の欠如していた時期は確実に存在するのである。

2015年、ビルゲイツはTEDトークの中で、我々現代人が恐れるものは、もはや抑止力でしかない核兵器ではなく、簡単に人間の制御を超えて炎上する生物兵器、もしくは疫病なのだと訴えた。

殆どの人が初めて経験する大規模なパンデミック。世界を震撼させるに至ったこの厄災の正体を誰もが知りたった。人々は分かりやすい答えを求め、それは、誰かの意図に結びつけるという思想に陥りやすい。それは、人格投影バイアスと呼ばれている。かつて厄災は神の怒りであった。それが、当時の人々が世界を理

解する方法だった。現代においては、そのバイアスは陰謀論と結びつく。現代の神話だ。犯人を求める心理。自分たちは自分たちが様々なバイアスに支配されていることを意識するべきだ。ドミトリーで出会った、中国人の彼の様に。この感染症の起源を生物兵器に求める心理が生んだ噂、それもまたそんなバイアスの仕業だ。このウイルスが生物兵器でない事は、ウィルス学者トレバー・ベドフォード氏によるRNA構造の分析により、人為的操作の形跡が見当たらぬことによつてを確認されている。



(左) 2019年におけるWHOへの資金提供順位  
(右) 旧日本帝国陸軍731部隊では生物兵器研究のもと多数の人体実験が行われた



# 逢魔が時の灯び

帰国便を待つあいだの香港国際空港に夕暮れが訪れつつあった。

青く、黒ずむ夕暮れの頃。古来の日本では「逢魔が時」と呼んだ。悪魔に逢う時刻。あるいは大規模な、そして禍々しい何かが起こる、「大禍時」とも書かれる。そんな時刻の森を、一台のブルドーザーが木を薙ぎ倒しながら進んでいる。そこから追われるようにして飛び立つ蝙蝠。蝙蝠は村の養豚所に逃げ込み、そこで口に咥えていた果実を落としてしまう。蝙蝠と豚の接触に由来する疫病が、世界を混乱に陥れる様子を描いた2013年に制作されたとある映画のワンシーンだ。渦巻く陰謀論とデマ。買占めに走る市民。都市封鎖。この映画は、その後訪れるCOVID-19という世界規模の厄災の姿を驚く程、明確に提示していた。渦中に身を置いてみてあらためて感じるのは、数か月前にはそんな景色が来るとはとても信じられなかっただということだ。

物語には始まりがある。映画の中で最初の犠牲者とされたのは、とある開発会社の重役だ。木を薙ぎ倒して森林を進んでいたのはその開発会社のブルドーザー。そして仕事で香港を訪れていたその重役は偶然、件の養豚所から仕入れた豚肉の料理を食べていた。感染は、一見無関係な、異なる人生を繋いでいく運命のようなものだ。ブルドーザーの如くプライバシーや人権を薙ぎ倒しながら進む中央集権国家、中国。そのハリウッド映画にあるような因果応報が、厄災を招いたとは言わないが、私たちは混乱の最中にあってそんな分かりやすい物語を希求する。民主主義の光が消えつつある香港は、「逢魔が時」に差し掛かる森林だ。そこを追われ彷徨う蝙蝠が辿り着いたのは

武漢の食肉市場だったのかもしれない。

薙ぎ倒された人権、そして民主主義は、あたかも感染症の様に権力者のもとに近づいてくる。イデオロギーの伝播を含む、文化的な要素が伝播される様子に対して、文化的遺伝子「ミーム」と名付けたのは、遺伝子行動学者リチャード・ドーキンスだった。

グレッグ・イーガンの描いた遙かな未来を述べるまでもなく、私たちが暮らすのは、すでに情報で成り立つ社会である。人々が憑かれたように追い求める「マネー」、紙幣や貨幣として実際に存在するのはそのうちの1割未満にすぎないという。残りは、金融機関に記録されたデータに過ぎない。存在しないものを信じている私たち人類。ベストセラーとなった書籍『サピエンス全史』によれば、存在しないものを信じる力を人類が得たことを、その本の著者であるイスラエルの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリは「認知革命」と呼んだ。進化により認知革命を経た私たちの祖先、ホモ・サピエンスは、その時代に生きていた他の人類達を駆逐した。他の人類たちは、目で見たもののしか信じることができなかった。認知革命は、話す機会さえない距離にいるリーダのもとで団結する力となり、私たちの祖先に勝利を齎したのだ。だから私たちは、今ここにいる。

信じるものは人物である必要ですらない。かつて世界の席捲するリーダーは、宗教の中で描かれたヒーローだった。イエス・キリストもマホメットも、実際に奇跡を起こしたわけではないのだろうが、人々はそれを信じた。宗教はそれと引き換えに、人々に死への恐怖を克服させるという役割を担っていた。だが、次第に科学、そして医療の進歩とともに宗教はその求心力を失つ

ていき、今、そこに置き換わるのは、資本主義、共産主義、そして民主主義といったイデオロギーだ。

産業革命はかつて民衆であった人々を資本階級と労働階級に分断した。それを分かつのは資本、マネーの有無だ。資本こそが力だと確信した人々は金儲けに奔走した。一方で、その競争に敗れた敗者は社会の闇となった。ホームレス、香港のケージハウスに暮らす人々。それは私たち人類が目指してきた姿では無かったはずだ。カール・マルクスは『資本論』で、資本主義の行く末、ディストピアを予言し、闇の中で燐っていた労働階級を蹶起させる引き金を作った。それは共産主義思想として、世界に伝播し、ソビエト連邦、そして中国を生んだ。それはユートピアの建立になるはずであった。

「資本主義は、資本の不平等を生み、共産主義は平等に貧困を分配する。」

そう言われる様に、共産主義国家には貧しいイメージがある。平等な社会が人々のモチベーションを下げると言われることがあるが、実際は、市場主義の支配しないはずの霞ヶ関でも各省庁で次官の座を目指した熾烈な出世競争が存在するように、共産主義でも競争と、それに向かうモチベーションは存在する。問題は、中央集権的に社会をコントロールするという方法だ。資本主義は基本的には中央集権システムを持たず、局所的な市場原理における判断の積み上げによって世界を回している。貨幣による報酬システムが、極限にまで分散された細やかな意思決定を行い、世界を最適化する。イノベーションにより発展が進む欧米諸国を後目に、中国が選んだことは資本主義の導入だった。

「白猫でも、黒猫でもいい。先に鼠を捕まえる猫、それが良い猫だ。」

鄧小平の標榜したこの言葉に象徴される「先富論」。まずは豊かになることが大事である。そして実際にその政策は成功した。潜在的に力を持つひとりひとりの人間が、市場原理に触れながら急速に市場を拡大させる。安価な労働力として始まった経済成長は、ある段階から、諸外国にとっての巨大な輸出先としてさらなる発展を遂げた。中国内で「80後」と呼ばれる、1980年以降に生まれた世代では明らかに生活水準が変わったと言われている。

社会主义国家樹立という共産主義のイデオロギーは薄れ、共産主義ならではの中央集権体制、つまりは独裁体制だけが維持されることになった。かつてマルクスはソ連や中国の誕生を見て戸惑ったという。マルクスが予測していた未来、それは共産主義国家は困窮した労働者による暴動によって引き起こされるというものだった。行き過ぎた資本主義の向こうにこそ待ち構える未来となるはずだった。ロシア、中国、これらの国はいずれも資本主義が発達した極北であったとは言い難かった。共産主義は、かつての宗教と同じく国家統治の手段でしかない。先富論という言い訳により、資本主義を導入した共産主義国家の欺瞞。権力を得るための経済政策の成功が共産党政権に力を与えたことは皮肉な事実だ。与えられた力は、統治者を狂わせる。独裁者である毛沢東の闇の時代を超えたはずの中国。劉少奇と共に追放された後、共産党政権の中核に返り咲き、頂点に上り詰めた鄧小平。経済政策で成功を収めた鄧小平に与えられた力が、鄧小平を狂わせる。

天安門事件はそんな状況の鄧小平政権下で起きたことを忘れてはいけない。それは今、香港で起きているような学生運動だった。すなわち、当時、その事件の瞬間までの中には民主化の兆しを育む土壌があったのだ。

学生達は公然と政府を批判した。さらには中国共産党内部ナンバー2の位置にいた、民主化運動に理解を示す幹部、胡耀邦の存在も大きかった。その時期、中国の民主化は手の届きそうな場所にあった。

一夜で変わってしまう景色。希望と絶望を隔てていたものの脆さを誰も想像することはできていなかった。1989年、北京。天安門広場での集会は、胡耀邦の死に対する追悼集会として始まった。抗議者達は瀬戸際

にいる思いだったのだろう。民主化を訴える最後の時として人々はそこに集まつた。そして、それは文字通り最後の時となってしまったのだ。





天安門事件に集まった学生には、機関銃が向けられることになる。その連射音の中、逃げ惑う人々の姿はYouTubeで見ることができる。(動画内5分40秒以降) <https://youtu.be/Ea3LiY7aMVI>

かつて劉少奇とともに独裁体制に反旗を翻し、人々に豊かさを齎した鄧小平は、目の前に現れた独裁の椅子の誘惑について手をつけた。中国の国会にあたる人民大会堂の前に広がる天安門広場に集まつた約10万人の抗議者たち。それら民衆に向けることになったのは、戦車、そして、機関銃だった。

死者の数は4000人に及ぶとも言われている。この事件以降、中国共産党当局による報道統制は徹底されることになる。現在の中国ではYouTubeも規制されており、多くの中国人は天安門事件の実際を知らない。

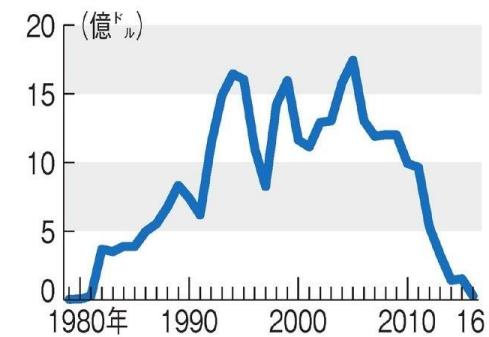
その当時、日本はバブル経済の直中、世界全体のGDPに対する比率にして約15%、世界2位を誇っていた。中国国内での抗議デモが過激化する中、日本がしたことは日本人滞留者の帰国を促したことぐらいだ。当時大きな影響力をもつ経済大国としての日本として、中国の独裁化を放置していて良かったのか。それどころか、

日本は中国共産党に配慮した言動に終始した。

天安門事件は、英語圏では”Tiananmen Square massacre”、「天安門広場虐殺」とも呼ばれている。1993年に放映されたNHKクローズアップ現代では天安門事件では死者がないとの検証報告をしている。そして、同1993年、天皇陛下は中国を訪問。天安門事件により国際社会が中国を糾弾している中での、この日本の姿勢は中国の国際的な地位の回復に大気を手を貸すことになったはずだ。さらには、天安門事件後の20年間弱、日本はODAすなわち開発援助名目で中国に対して、それ以前の約2倍の金額をも提供し続けていた。今の中国の発展に寄与し続け、中国共産党というモンスターを育ててきた私達日本の責任を問い直すべきである。

天安門事件を象徴するとされる「戦車男」の姿。  
現在の中国共産党の前にはもう現れないのか。

対中ODAの推移。天安門後も日本は中国に支援を続け、独裁政権の成長を促した。



そして現在、GDPにおいて日本を軽々と抜いていった中国は、時流の祝福をも受けことになる。成長を始めた国家が遭遇するはずであった「新興国のジレンマ」を、AIによる産業の革命が吹き飛ばしつつある。労働力に代わるAIが安価な生産を可能にし、次なる新興国に安価な人件費によるメリットが手渡されることを阻んだ。さらには、AIは巨大な監視システムの原動力となって、中央集権国家を支えることとなった。

国家が成長するに従って、必然的に民主化が起きるとする「リプセット仮説」。経済の発展は、都市を形成し、中間層を成長させる。教育水準が上がった市民は、権威主義に疑問を持つに至り、民主化運動が進むというのだ。だが、現代においては、中国に限らず民主化は進んでおらず、この仮説そのものが崩れつつある。民主化が進まない理由は、中国に代表される新興国が国家資本主義とも言える、大規模な市場介入を行うことで成功をしているということ、IT産業への移行により格差化が進み中間層が成長していないこと等が上げられる。

ただし、先に示した様に、中央集権体制に腐敗はつきものだ。かつてのソ連がそうであったように、忖度と強制の両方の圧力によって統計の数値は書き換えられる。急速な成長を続ける中国が発表し続ける数値に、世界が疑問を持ち続けていた中、致命的な厄災が中国を、そして世界を襲った。

先にアイ・フェン医師の武漢市中心病院の記録にも出てきていた34歳の医師、李文亮氏はその後、新型コロナウイルスに感染。2月6日に死亡した。

国民の生命の危機にあたり、一刻も早い対策をと呼びかけた李医師の声は、権力によって抑え込まれてしまった。国難は権力

を揺るがす。故に、国難の隠蔽は権力存続に必要な行為ということか。例え、それが多数の国民の死の拡大に繋がるとしても。

李医師の訃報は中国国民が抑えていた感情を大きく揺さぶった。

「英雄よ、安らかに眠ってください」  
「人民がなぜ言論の自由を有してはいけないのか。なぜ政府の発表を疑問視してはいけないのか。」  
「削除されても、書き込み続ける」  
「私たちに言論の自由を！」

2月7日午前1時。李医師の死亡からわずか4時間の間に、202万回の閲覧、8000を超えるコメントが微簿に投稿された。

「健全な社会では、一種類の声だけにするべきではない。」

李医師は生前、新たな感染症について取材を受けたメディアにそう語っていた。彼には現在の中国の体質がもたらす帰結が見えていた。民衆よりも権力が優先されることによる悲劇。見かけ上の豊かさに隠され得る欺瞞。COVID-19はそれを露呈するきっかけを与えたのだ。

北京大学、精華大学などの教授は連名で全人代に向けた公開書簡を発表した。その中では、李医師の事例は、言論の自由が保障されていなことが国民の安全を脅かすことを示すものとして、言論の自由行使可能とすることを訴え、李医師が死去した2月6日を「国家言論自由の日」として制定することを提案した。

香港の抗議デモは、香港の権利の維持のために始まった。中国の民主化を意図して始められたものではない。だが、リーダーを置

かずとも結束できるという事実、中国政府による抑え込みの限界、逃亡犯条例の撤回、台湾総統選挙への飛び火。それは中国政府に対抗する民衆の力を証明した。それは中国本土の市民の価値観を揺るがしたに違いない。そして、李医師の死によって、ついにそれが始まったのだ。中国共産党が恐れていた民主化というイデオロギーの感染だ。

レ・ミゼラブルにおける劇中歌、フランスにおける怒れる民衆達の歌。雨の振りつける香港、エジンバラ広場での抗議集会、そこで歌われていた歌もある。それは香港における抗議活動の象徴の歌になっている。李医師の死の直後、中国ではこの歌をダウンロードする数が急増したのだという。この歌は、中国当局から禁止されているにも関わらず。



人々の歌声が聴こえるか。

怒れる者たちの歌だ。

もう隸属はしないという決意の歌。

胸の高鳴りが、太鼓の鼓動と共に鳴しあうとき、  
そこから新しい人生が、まさに明日はじまる。

『民衆の歌 (Do you hear the people sing?)』

レ・ミゼラブルの舞台となったフランス、1832年の六月暴動。その背景の大きな要因であったのはその年の春のコレラの流行であった。18,402人が亡くなった、疫病による惨事。哀れな民衆達。無慈悲な厄災に逢う時、人々は理由を求める。それはかつては神の怒りとされ、現代では権力の行った判断ミスが理由とされたりする。場合によっては、意図的に行われたという陰謀論も広がることになる。厄災を自然発生的なものとして捉えず、物語をつくる種族であるのが私たち人類だ。それは権力機構を搖るがし、歴史の転換点となり得る。厄災の度に抜本的な社会構造を変化をもたらすことは、私たちの遺伝子に刻まれた本能なのかも知れない。

疫病は革命を引き起こす。それは人間の大衆心理に根ざす事実だ。中国において、歴史の中で大規模な疫病は何度も発生している。それは「大疫」と呼ばれ、王朝の転覆を引き起こした。紀元前3世紀の周王朝の崩壊、14世紀にモンゴル民族が作り上げた大帝国、明王朝の瓦解。そして、その後の最後の王朝、清朝の衰退。いずれもその滅亡期には大疫に見舞われている。周囲の人々が感染症に倒れていく様子は、民衆に世界の終わりを予感させ、その様な危機に瀕して人間の本能は、解決への物語を渴望し、分かりやすくそれを語るリーダーの元に集結する。その物語は当時の国家こそがその災いの原因であるとし、新たなるリーダーの元、大規模な世界の再構築に向けて、猛進するのだ。

先に述べたアラブの春の様に、その物語は時に幻想だ。改革が正しいとは限らない。今、世界はこの厄禍の原因を習近平

政権による隠蔽に見出そうとしている。隠蔽のない世界こそが、この災いを繰り返さないために必要なだと。それは、分かりやすい物語にすぎないのかもしれないが、それが人々を精神の檻から解放する以上、受け入れない理由はない。

もちろん、習近平政権が黙って待つようなことはしない。想定される手段は2つだ。別の物語を提供すること、もしくは、人々が物語のもとに集結することの阻止だ。

習近平政権の用意する別の物語とは、このウィルスが米国によって意図的に拡散されたものであるとするなどと言われている。年末から米国内で2019年末から猛威をふるっていたインフルエンザが実は新型コロナウィルスによるものだという噂、米国の経済破綻を隠蔽するための世界的な危機がつくられたという噂。限りなく陰謀論に近いこの噂に火を灯して広げることができれば、自らが物語の攻撃対象となることは避けられる。そして、国内ではそれ以外の物語が広がることを統制する。つまりはインターネットによる情報拡散の力を、AIによる監視社会の力で防ごうとしているのだ。

さらには、このコロナ禍は、監視システム導入に絶好の口実を与えようとしている。当局は交通機関の利用記録やGPSを使って市民の移動記録を把握し、罹患者発生時に濃厚接触者を特定できるようにする仕組みを提案している。市民の命を守るために仕組み。その甘言によって、人々の行動は監視される。過去の例に漏れず、コロナ禍は必ず過ぎ去る。ただし、

過ぎ去った後も、監視システムは残される。

ユヴァル・ノア・ハラリ氏が、2020年3月、英國フィナンシャル・タイムスに寄稿した記事が話題となった。ハラリ氏は監視社会の進展を警告している。具体的な例として上げられたのは、ハラリ氏の住む、イスラエルが1948年の独立戦争

（第1次中東戦争）の際に宣言した非常事態宣言の際に、新聞の検閲等の導入が行われたが、現在においても多くは解除されないまま残っている。

それはもはや、眞の原因とは何かというナイーブな問題ではない。物語のコントロールの問題だ。それは、このコロナ禍を舞台とした、民主主義と独裁権力による情報戦だとも言える。監視社会の大幅な進展を受け入れてはいけない。私たちは、精神の檻を破り、私たちが物語を選ぶ世界を作らなければいけないのだ。

私たちは、少なくとも監視システムや政府の権限拡張に慎重にならなければならない。このコロナウィルスの発見が遅れた原因を作ったのは、権限を持ちすぎた中央集権体制、中国共産党なのだ。

香港国際空港発、成田行きの便が飛び立とうとしていた。機内の窓から望む、香港の夜景。数か月前にはライオン・ロックに灯る「ホンコン・ウェイ」の光が、そこに灯されていたはずだ。

抗議活動の動機は複雑だ。イデオロギーの対立だけでそれを語ることはできない。民主化の先にあるのが、自国優先の思想

であるのであれば、それがもたらすのは別の形の不幸だ。中央集権国家が国家間の競争で有利になるとき、人々は、強大なリーダーを希求しはじめる。つまりは、民主化は自壊の道を歩むことになる。そして、リーダー自身も自壊し、狂気の独裁者になってしまうのだ。先に示した様に人間の精神は、強大な権力を持つ事に耐えられないのだ。

私たちが目指すべきなのは、正しく民主主義を機能させることなのだ。強大な権力の上で報告される偽装された数値を生んでは行けない。権力からの監視に臆することなく匿名のまま、人々の思いを明らかにすること。監視社会の中でも消えることのない、ライオン・ロックの灯が必要なのだ。

過激化する抗議行動は、政府の強行手段を導いてしまう。1989年の天安門事件しかし、後に国家安全法が施行される香港でのこの抗議活動しかし。

また、元日の抗議デモにあったように、参加者の人数は正しくカウントされることはない。匿名でありながら民意を正しくカウントする技術が期待される。

そして、新型コロナウィルス危機以降、集会そのものの感染症への懸念が健在化したことにより、抗議の形は変わらざるを得ない。人々が集まり、その思いを可視化するという、抗議デモ、ヒューマンチェーンの様な活動は縮小することになる。先に紹介した「100万人のキャンドルナイト」についても、2020年に計画されていたものが中止となった。



今、人々が集うことなく、平和に、そして安全にその思いを可視化する手段を用意するべきなのだろう。

当然それはITの力を活用することになる。中国のような監視国家においても個人を特定されることなく安全に、そして香港の抗議デモの様に違法行為として過激化することなく、人々の心を動かすアートとして平和的に可視化する。

例えば思い浮かべて欲しい。人々の思いが、光となってオーロラの様に都市の上空に漂うとしたら。そして、そのオーロラの輝きが、空の上で裂織(さおり)の様に紡がれていくとしたら。

## おわりに

すべてのものには期限がある。賞味期限を迎える30個のパイン缶を平らげるところから始まるもの。映画『恋する惑星』は、恋愛の終わりとはじまりを描くとともに、香港の終わりとはじまりを描いていた。

物語に深みを与える手法の一つに、微視的な体験と大域的なうねりを共鳴させるというものがある。この記録はルポルタージュのようなものであるのだから、個人的な体験を語るものだ。ただ、その体験は、香港のデモにおける過去の歴史的な経緯と、中国の民主化という未来の狭間にある点で極めて大域的だ。だからこそ、私は23年振りに香港に足を踏み入れた。23年前、バック

パッカーとしての旅に憧れただけで訪れた香港。中国返還前の姿を見る最後の機会というのはただの偶然、後付けの言い訳のようなものだ。そんな偶然の経験が、歴史の目撃につながっているという事実。そんな偶然こそが人生の最大の愉しみと言っても、間違いではないはずだ。

一方で、大域的な物語は局所的な体験に回帰する。自由を勝ち取るというイデオロギーを紐解けば、香港と中国という隣人同士の嫉妬という感情に辿り着く。さらには、より個人的な領域、筆者の境遇に至るのだ。自分は何故、この文章を書いたのか。

この文章は匿名で書くことにしたのであるから、具体的には触れないが、筆者はこの数年で図らずもある貴重な体験をした。それは勝ち取ったものではなく、そう、出会ったと言った方が正しいだろう。手の届かないと思っていたものが、突然眼前に現れる。手の届く範囲にあったものは想像以上に多かったのだ。それを実現するには、想像を絶する努力が必要なのかと言えばそうではなく、むしろ発想の転換、気付きに近い感覚だ。今まで無関心だったのは、それが手の届かないところにあると思っていたからだ。歴史的な事件は、受験勉強の際につかった参考書の中のものにすぎなかつたし、ましてや自分がなんらかの役割を担

うことができるのではないかという発想は浮かばなかった。

雨傘運動を率いたジョシュア・ウォンは若くして歴史に名を刻むことになった。自分を含む一般人と彼を隔てるものは何であるか。それは運命の偶然だと言ってしまうのは早計に過ぎる。ジョシュア・ウォンが一般人であるのと同じく、だれもが当事者になり得るのである。必要なのは、意識の中に留めることすらしなかった景色に目を向け、それらをつなぐ物語を紡ぐことなのだ。

個人的な物語は、大局的なうねりとなって歴史の流れに繋がっていくのだ。

『香港、深圳、そして武漢 — 抗議デモから繋がるもの、その行方』第4集  
第1.0版  
2020年6月20日